

(研究部門)

「学びに向かう力の定着をはかり、主体的に読んだり、書いたりする子どもを育む授業づくり」

大阪市立伝法小学校 溝渕 悠爾

1. 研究主題設定の理由

本校の子どもは学習に意欲的に取り組んでいるものの、その学びが得点という成果に結びつかず、主に「読むこと・書くこと」に大きな課題であった。「読む・書く」力が育っていない原因として、自分で問題をしっかり読み解く力「読解力」が十分身につけていないことが考えられる。そこで、読解力が高まれば、問題文などを正しく理解でき、子どもの学習意欲が学習理解に結び付くのではないかという仮説を立てた。そして、読解力を身に付けるために、「読む力・書く力」の習得に焦点化し、研究教科をすべての学習の基礎となる国語科、なかでも説明文教材に設定した。説明文教材の読解は、情報を的確に捉える力が不可欠である。説明文の読解を通して、正確に読み取る力を育むことで、国語科だけでなく他教科の文章なども正しく理解することができると考えた。

以上のことから、子ども達が文章の内容を正しく読み取り、自分の考えを書くことができるようになるために、「読むこと・書くこと」の両面から指導法を工夫し、読解力を育成するため本研究主題を設定した。そして、本校の学校教育目標「主体的に学び 心豊かな 実践力のある子どもを育てる」にも立ち返り、実践力の育成が急務として、学校経営の重点目標についても同様に設定した。

2. 研究の趣旨

「国語科の説明的な文章について、主体的に読んだり書いたりする指導法を工夫することで、読解力を育てることができる。」という仮説を立て、授業改善と学力向上への取り組みを実践する。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

① 説明的な文章において付ける力

学習指導要領国語科の目標にある、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成」に資する授業実践

② 説明的な文章における読みの基礎・基本

説明文教材において「身に付けさせたい力」を具体化した授業実践

③ 読む・書く活動の充実

読解力を支える「読む・書く」活動の充実

③ 発問の工夫

本時のねらいに迫り、思考を深めるための発問の工夫。

④ 言語活動の工夫

場面に応じた言語活動の設定の工夫

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

すべての授業実践に共通していたのは、情報を分類・整理し、仲間と協働して情報を再構成して表現することである。付箋や思考ツール等を活用した情報の分類・整理の仕方の工夫、ペアやグループなどの多様な意見交流の形態やカードやパンフレット、プレゼンテーション等の表現方法の工夫が指導法の工夫の大きな要点だったと振り返る。このように全学年を通して、情報を分類・整理する際の意見交流や多様な発表形態の場づくりといった言語活動の充実を図ることで、子どもたちは目的意識をもって学習に取り組み、意欲的に言語能力を身に付けることができた。また、でんでん漢字検定や音読タイムの取組により、子どもの読む・書くことへの意欲が向上し、実際に漢字を着実に習得する子どもが増えた。

此花区で実施している单元テストについては、国語科における同一母集団の到達度を昨年度と比較すると、4年生では約5ポイント、6年生では約9ポイント向上した。すべての学年で十分な成果が得られていないことが課題として残るものの、令和4年度に実施がない3年生を除いた3学年の比較では、昨年度より全体平均として約3ポイント上昇した。観点別で比較をしてみると、4年生では「読む」と「漢字」が、5年生では「書く」が、6年生では「読む」と「書く」と「漢字」が向上していた。また、全国学力・学習状況調査における国語科の標準化得点を昨年度と比較すると、全国が1.6ポイント、大阪市が3ポイント向上しているのに対して、本校は8ポイント向上した。全国学力・学習状況調査における国語科の標準化得点も区单元テスト同様に、読み・書き・漢字における到達度が向上したことがわかった。

すべての学年において文章を読み取るために、必要な情報を分類・整理し、ペアでやグループでの意見交流によってそれらを再統合し、表現するという形で自分の考えをまとめる活動を積み重ねてきた。本校では、この一連の学習のプロセスを身に付けることが、子どもの学力向上につながると考える。情報を分類・整理するためには読解力が必要不可欠である。そのため、でんでん漢字検定や音読タイムといった取組を継続して行い、読解力の向上に努めていきたい。

(2) 今後の課題

授業実践については、各学年の系統性を教職員で共通理解し、それぞれの学年でどのような力を付けるべきかということを整理していく必要がある。学校全体で系統的な指導をするには、教育課程や研究組織について見直し、改善するといったカリキュラム・マネジメントが不可欠である。教職員で学校の課題や子どもの何を伸ばしていくのかを共有し、学力向上に向けた校内研究を一層推進していきたい。